

## 青蓮院吉水蔵慈円関係聖教について (下)

阿部 泰郎  
菊地 大樹

### はじめに

青蓮院吉水蔵に伝存する慈円著作について、前号(上)においてその概要と一覧を示したが、この続稿では、『青蓮院門跡吉水蔵聖教目録』の記載をふまえ、東京大学史料編纂所の所蔵する青蓮院吉水蔵のマイクロフィルムのHICATシステムによる画像上からの確認を経て、新たに検出した慈円関係著作(四七点)のうち、一二点の慈円著作聖教について、略解題を付して紹介を試みたい。なお、(上)には、慈円著作とは確認されないが、慈円手摺本として「実御皮子」に収められていたことが書写識語によって知られる写本の一覧も加えている。また、「吉水蔵聖教慈円関係聖教一覧」所掲の分についても、慈円が先師等の聖教を相伝書写した分をも含むが、これらは慈円著作としては扱わない。本稿では、これらのうち、慈円識語と、本文の記載内容から、慈円著作として新たに確認された分に限って、その概要を解題という形で提示する。

以下には、まず、その著作年代が識語等により明らかかな聖教を八点(『大熾盛光』<sup>口決</sup>、『大熾盛光秘』(種子事)、『三種悉地記』<sup>至極</sup>、『三種悉地』<sup>摩訶</sup>、『薬師記』<sup>私</sup>(未聞極秘)、『北斗入三摩地』、『五智』、『甚深至極鈔(道場観、一切行法)』、および、その記述内容から慈円の著作であること

が確実な聖教を四点(『附法事』、『真言宗』<sup>私</sup>(真言御問答)、『本末究竟深入抄』<sup>第三</sup>、『本末究竟深入鈔』<sup>第四</sup> 従本修因)を取り上げ、各解題の後に全体に亘る慈円著作聖教の特質を整理して提示した。第一・二節の各解題と結論の「吉水蔵慈円著作聖教の輪郭」は阿部が担当した。

以上の作業は、慈円における顕密の教相・事相の柱を見定めるうえで大きな意義がある。第三節ではこころみに、その中から慈円の法華法関係著作聖教を中心に、関連する修法記録等四点について注目してみたい。このうち、すでに紹介されている『法花別帖』のほかにも、第六九箱には法華法関連文献が集中している。ここではその紹介と問題点について記述した。以上は菊地が担当した。

以下、本稿は、慈円の新出著作であることを確認し、慈円の事蹟と史料の解明にも資する基本的な情報を提供することを主たる目的とする略解題として、書誌的な記述は最小限として(詳細については『聖教目録』の記載を参照されたい)、表題、装丁、数量、丁数等に限った。慈円識語は可能な限り収録したが、本文中の慈円による序跋や識語に類する記述は全てを引用していない。また、門弟や後人による書写識語等は、これも全文は掲げず、必要な要点を示すのみとした。内容についての記述は、慈円の足跡を尋ねる為に重要な情報を中心に、その著作の主題や方

法について知る為の記述を中心とする。加えて、既知の慈円著作聖教との関連を示す記述にも留意したが、紙幅の制約上、もとより十分には言及できなかった。今後、その全文の翻刻公刊と共に、慈円の宗教テクストの全体像を復原・解明することを期したい(引用する本文については、全て通用字体に統一し、句読点、返点、濁点を私に補った)。

一 著作年代が明らかな聖教

①〔大熾盛光口決〕(秘々中深秘私六)〕第七二箱一二号、横帖袋綴一冊、墨付二八丁。

表紙左外題「大熾盛光口決」、同中央「秘々中深秘私六」、同右下識語「青蓮藏」。

(上) 註20にも言及した、「大熾盛光私一」から「(同) 私十」までの慈円による『大熾盛光』法聖教一具のうち、「私六」に相当する「口決」であり、表紙中央外題が示すように、全体の四重秘釈における秘事を記す。内題は「熾盛光」。冒頭より前半は、「谷私記」すなわち皇慶と長宴による台密谷流の熾盛光法の「私記(式)」を参照し、これに逐次「此流」(三昧流)の作法を加え、更に自身の「愚意」「思慮」による注記を添える形で、次第に沿って記述される。特に本尊の種子に関しては「別帖」を為すとあり、これが「私七」の『種子事』(『大熾盛光秘』)に当り、そこには「或載三至極之秘事一、或顯三愚昧之料簡一」という。この中で、「私記之外口決事」(四ウ)として、祭文を読む作法を、任意に偈頌を作ることを含めて例示する。それら作法に関して懇切な指示を加える意図について、「凡、如レ此細々行用ハ、不沙汰人ノタメハ臨三其期一、散々無レ何テ馳過事也。作法進退深存タル人ハ、必能々首尾叶テ令レ修レ之。誠人目デタリ。又、叶三正意一事也。一々難三分別其法一、一ニ如レ此沙汰畢ヌレバ、以レ之、他事モ余法モ可二准知一也。」と教訓する。

「礼拝事」(七オ)より燼燭供の「伝供次第図様」(八オ)を、「前唐院(円仁)秘本」の「正本曼荼羅」を「三昧阿闍梨(良祐)令レ写給本」と儀軌説とを較べながら「秘本図様」に拠るものとし、七十天供の次第を示して、次に、

而予、建仁二年十一月八日ヨリ、於三京極殿一、院御祈修三此法一之時、具如レ此立二次第一(中略)已有二効驗一云々。具観念、專可レ有二感応一也。(九ウ)

と自身の修法について述べ、「結願時」(一〇ウ)において、「凡、不可二忘却一之程ノ秘決ハ、不三書付一事也。仍、口受ト云也。而、末学之機根、甚以愚也。仍、多二当时所学者一、易二廢亡一也。仍、粗々記二置之一。先達ハ、不レ然也。吉々可レ秘決之。」と、秘決を書くことについての意義を説く。「念誦次第私用心」(一一オ)では、「已上大旨也。少々後日改レ之、以レ朱付レ之」と再治したことを示し、更に「発願事」では、「但、予加レ案云」と、「今度如レ此用レ之」と自身の意樂により加えた事例を示し、「如レ此事、深行都法阿闍梨ノ意樂也。用捨只在二人意一。予之今案如レ此。」という。この法では護摩の火壇上に舍利を安ずることと、道場観を尤も用意すべき事などは「已上秘事、私記之図ニ猶以レ不レ載之事、以二口決之心一記レ之」と注した上で、前半の著作識語に続く。

不レ見二口決事ハ、又、属二当时行事一、加二調色一。為レ備二廢亡一、具記レ之。非二面受弟子之外一、不レ可レ披レ之。金剛薩埵能々可レ守二護之一一給。金剛仏子慈一記レ之。(一五オ)

以上の本篇に続き、「此法成就真言事、能々可レ決レ之。」として、本尊口決、尊形区別など、その「内証」を明かす口決が展説される。その上で(二六ウ)「凡、真言教第一口決ノ習ニハ、此尊ノ法ニ諸尊ノ秘事ヲ説キ、彼尊法、此尊ノ秘事ヲ説也。都法ノ阿闍梨、是ヲ見合セテ能々得二其心一、甚深之秘法ヲハ、修也。」と用心を説くが、これは「桂林僧正ニ面受、

「慥如レ此」と、全玄より示されたという。更に、「今法ニ所レ草之四種護摩壇作法<sup>ニモ</sup>、只以<sup>ニ</sup>熾盛光<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>部主<sup>一</sup>」とするが、これが『大熾盛光』一具の「私<sup>一</sup>」から五までの分を指すか。

続けて付加されたのは「行仁物語」というべき一段で（一九オ）、熾盛光法の「沙汰」として「一字金輪成就真言」を用いることを、台密の名匠達が皆知らなかった消息を、「抑、先年<sup>ニ</sup>行仁法橋<sup>トテ</sup>、宮僧都仁禪弟子、金剛院門流<sup>ニテ</sup>、相豪、仁基ナドイヒシ真言師、頗受法人アリキ。件人令<sup>レ</sup>謁之次、物語云<sup>一</sup>」と伝聞した裏話である。慈円はこれを「雖<sup>ニ</sup>無益<sup>一</sup>、事之次注<sup>レ</sup>之。不<sup>レ</sup>可<sup>ニ</sup>外見<sup>一</sup>」と結ぶが、観性にこの真言を問うなど、強く関心を示している。更に、諸尊法成就の真言は皆な一字明で通用することは、山門の堂衆ですら皆知ることだが、伝受せずとも心得ることについても、此は面受なければ「不<sup>レ</sup>覚不<sup>レ</sup>知」となる、と教訓を引き出している。その上で、全玄より面受して得た一字明と三字明を明かし、その真言一字明の料簡を述べたあと、師伝の必要を強調、「疑<sup>ハ</sup>智之基也」と、疑問を抱き広く文籍を伺い、そこに師説に叶う文を見いだす研鑽の方法を説く。「此事、後日有<sup>ニ</sup>開悟之旨<sup>一</sup>、乍<sup>レ</sup>思記<sup>ニ</sup>第七帖<sup>一</sup>畢。」と、併せて次に問題を掲げる「私七」「種子事」を記したことも明かしている。そして「仏眼成就壇」の次第に私記を加えた後、次の如く再治識語がある。

建永元年十一月一日、大略再治畢、努力く（二一オ）

以下、追記として「今法」について「増益護摩請供北斗法事」を「本意」とする深意を注し、「無文有義智人、用<sup>レ</sup>之者此義也。」と結ぶ。続いて、「此上、重々不審、載<sup>ニ</sup>左問答<sup>一</sup>」と、以上に説いた意趣についての確認を四箇の問答（二二オ〜二六オ）を設け、その結びの後、追加の問答を三箇立て、自らの「領解」に資している。最後は、智人と自称するのを「尾籠」と謂うべきか、という皮肉に満ちた問いだが、その答え

として、「此難此疑<sup>ハ</sup>、迷情之覺ノ前<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>此難<sup>一</sup>。先、此師説等開<sup>レ</sup>悟之<sup>一</sup>、令<sup>ニ</sup>問答<sup>一</sup>也。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>加<sup>ニ</sup>迷情之難<sup>一</sup>」と総括する。

②『大熾盛光<sup>秘</sup>（種子事<sup>私七</sup>）』第七二箱一―号、横帖袋綴一冊、墨付一九丁。

表紙左外題「大熾盛光<sup>秘</sup>」同中央「種子事<sup>私七</sup>」。

冒頭、「一切法無壞、諸法不壞」の意は『法華經』の「是法住法位、世間相常住」と同義とすることに始まり、「尺迦仏種子<sup>不</sup>字ノ義、破有法王出現於世ノ文、是也。」の義を釈する為、前唐院秘本曼荼羅中、大熾盛光法曼荼羅の中台以下、諸種子の義を挙げ、「一切ノ字義」について、『時処儀軌』、『四帖』、『大智度論』、『大日經』義釈等の各字義に関する「心」を明かす本文を挙げるが、特に『法華經』の「世間相常住」に則して、独自の「開悟」を、空板中の三諦に宛て、「金輪之円融三諦也。相即三諦也。」と解し、文証として『慈覺大師伝』の伝教大師の夢告を引く。

以下、字義に関して問答を五箇条立て、先徳の所説に不審を成し、「愚案」を示して、先徳の説といえど訛謬失錯あれば勝劣を自ら思え、と『悉曇字記』に照らし、「今、文証、私案目、以符合。於<sup>ニ</sup>邪正<sup>一</sup>者、只任<sup>ニ</sup>本尊之知見<sup>一</sup>。予之門人、必可<sup>レ</sup>存<sup>ニ</sup>此義<sup>一</sup>也。」と教訓する。また、不審を散ずる為に、広く字び、普く問えと示し、「雖<sup>レ</sup>然、於<sup>ニ</sup>一途之正義<sup>一</sup>者、莫<sup>レ</sup>危<sup>レ</sup>之。努力く（七ウ）という。

次に、釈迦種子、一字金輪種子等の字様を各種参照し、これらと無所不至印の五種阿字・五輪種子とを重ねる。更に、「東寺師（空海）伝」が<sup>不</sup>字を<sup>不</sup>字大日に帰すのを、「定有<sup>ニ</sup>深心<sup>一</sup>」なれど「予師伝」に非ざる「傍論」と排し、その心を決すべく、自身の「開悟」すなわち「尺尊、末法衆生<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>利益<sup>一</sup>」、星宿諸天顯<sup>レ</sup>現虚空<sup>一</sup>、禍福<sup>ヲ</sup>掌給<sup>ヘリ</sup>。故我種子ノ下<sup>ニ</sup>諸天ノ種子<sup>ヲ</sup>加<sup>テ</sup>、其字中台、今無所不至等、皆悉令<sup>ニ</sup>合成<sup>一</sup>、

教令諸天<sup>一</sup>、具足功德<sup>二</sup>、転禍為福除災安穩<sup>三</sup>守護給也(下略)「(一ウ)が改めて自覚された。但し、「多加<sup>二</sup>愚案<sup>一</sup>」。邪正任<sup>三</sup>本尊之知見<sup>二</sup>耳」と留保し、以下、再び問答を設けて、「凡、曼陀羅<sup>一</sup>口決等、禾又(秘経)二<sup>ノ</sup>帖等委悉也。能々可<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>彼等<sup>一</sup>也。」と他の著作を参照すべく示す。この種子義が「愚案」に叶う文を尋ねて、また「有<sup>二</sup>不可得<sup>一</sup>者、彼世間相常住<sup>二</sup>諦義、三部大日<sup>ノ</sup>帖<sup>三</sup>可<sup>二</sup>見合<sup>一</sup>也」(一三ウ)ともいう。

特に、「十九箱之内、有<sup>二</sup>此字积<sup>一</sup>云。『如来頂髻一字奇特金輪王真言呪曰。』と、その本文を偈を含めて全文を引くこと(一四オ)一六オ)が注意され、今言うところの「二九一箱」を慈円が座右に参照していた消息が窺われる。この引用の後に、「已上、承元三年二月廿四日、於西山草庵書之了」の慈円著作識語を記す。最後に、この一字を正しく五輪に帶すことを、一往配立の説を示すため、問答一条を加え、五字を惣別の義において示す。以上の内容は、全体として「私六」の「大熾盛光<sup>口決</sup>」と緊密に呼応し、そこで示された問題が展開されている。

### ③〔三種悉地記<sup>至極</sup>〕第六一箱一号、横帖袋綴一冊、墨付四七丁。

表紙欠損、『目錄』は、初丁の目次の「最極秘密事」を採るが誤り。

同内容の第五六箱一〇号の鎌倉中期写本表紙により外題を改める。現状、遊紙の表に本書前半の篇目「真言事<sup>ノ</sup>印事<sup>ノ</sup>二尊事<sup>ノ</sup>最極秘密事<sup>ノ</sup>此教為本事<sup>ノ</sup>」<sup>已上</sup>／蘇悉地真言事<sup>ノ</sup>奥<sup>ニ</sup>有深秘等<sup>一</sup>」が書かれ、初丁に序文(漢文)、二丁を白紙とし、三丁より本文が始まる。

まず、三種悉地印を、伝教・慈覚が伝えた「真言宗」の印として、教の至極とすることを師伝とする意義を、「予、覚<sup>レ</sup>知<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>其因縁<sup>一</sup>者(下略)」と問い、「余、年来之存<sup>レ</sup>知其子細<sup>一</sup>、此程<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>不思入<sup>一</sup>、無沙汰事也。」と省み、そこに『尊勝破地獄法』を披見し、そこに登場する善

住天子が起教菩薩であることから、この文言に案を加え、尊勝陀羅尼の肝心が三種悉地真言であることを知る。「已上事、三部大日抄物<sup>ノ</sup>中帖<sup>ニ</sup>具書<sup>レ</sup>之了。」と、関連する自身の著作を示しつつ、その三印明三種悉地真言は、伝教大師が順曉より伝受し、『顯戒論縁起』にも『官符』にも載せられ、「十九箱」中にもあるが、尊勝陀羅尼は俗人小兒まで流通し、上・中・下品各真言は、「山門小学生」まで常識として秘密でもない。それを師説の口伝を得て初めて最極秘密事とは知る(これは『大熾盛光<sup>口決</sup>』と共通する認識)。これを「今教<sup>ノ</sup>本」と開悟する為、上記の篇目に示された六条を挙げて論ずる。その上に問いを加え、「具不<sup>レ</sup>殘<sup>二</sup>己心中<sup>ノ</sup>了知<sup>一</sup>」と述べて、条条毎に問いを重ね、各条末尾には、慈円の述懐詞ともいうべき注文が加えられる。第六条の蘇悉地真言事では、これを「一宗大事」として「在<sup>二</sup>別帖<sup>一</sup>」と示す。この前半部の識語と、続く著作識語(三一オウ)を次に示す。

於<sup>二</sup>以前五箇条<sup>一</sup>者、殊在<sup>二</sup>今帖<sup>一</sup>記<sup>レ</sup>之。然則、真言一教密語之深奥、是在<sup>二</sup>三種悉地三身之真言<sup>一</sup>。秘密上乘、愚老之開悟、亦在<sup>二</sup>尊同一<sup>一</sup>、二明之秘密解<sup>レ</sup>之。若叶<sup>二</sup>正意<sup>一</sup>者、出離必期<sup>二</sup>順次生<sup>一</sup>而已。

于時、承元三年<sup>已</sup>初冬第十之候、乍<sup>レ</sup>懷<sup>二</sup>其恐<sup>一</sup>記<sup>レ</sup>之訖。金剛仏子、

この著作識語の後に、三身印真言についての異説と、邪義僻説の生ずる事への警告が示され、次いで愛染と大日・金剛薩埵についての追記や用心が喚起される(三六丁オ)。

後半は、改めて三種悉地真言と尊勝破地獄法との関連を「開悟」した経緯を、「五藏曼荼羅之法」により「事之道理、教之至極」により覚知した旨が説かれ、その過程で、弟子慈賢との「談義」により、重要な課題の発見に至ったことが明かされる。次に掲げるように、門弟との具体的な対話から深義の覚悟に及ぶ消息が詳述されるのは、他の著作には見

えないところである。

慈賢云。自身豈非<sup>二</sup>五輪塔<sup>一</sup>哉<sup>云々</sup>。付<sup>二</sup>此一言<sup>一</sup>、書<sup>二</sup>此深奥<sup>一</sup>也。

彼、不<sup>レ</sup>覺<sup>二</sup>此深義<sup>一</sup>。予者、未思<sup>二</sup>合<sup>一</sup>念。為<sup>二</sup>之如何<sup>一</sup>々々。依<sup>レ</sup>之、談義尤大切也。互助<sup>二</sup>行化<sup>一</sup>云々。互為<sup>二</sup>主伴<sup>一</sup>云々。(下略、四三オ)

慈賢は、正治から建保年間に至る慈円の教示言談を記録した『四帖秘法』を遺しているが、この三種悉地法の創成から実修に至る過程でも助修・伴僧として終始重要な役割を果たし、その修法日記として『賀陽院殿秘法日記』(第七三箱一四号)を記してもいる。

この後半の中で注意されるのは、「法花法事」への言及(三九ウ)である。その中で、「予、随分<sup>二</sup>開悟<sup>一</sup>法也。重々細々、如<sup>二</sup>此双紙<sup>一</sup>、三帖<sup>二</sup>記<sup>レ</sup>之」と示すのは、本書の成立より後、承元四年九月に草稿を成源に与えて清書せしめた『法花別帖』を指すのではないか。「然而、彼等本文并口伝之内、御口決云可<sup>二</sup>准知<sup>一</sup>云々」と、その内容が本書とも深く連関することを示唆している。続けて記されるのは、慈円による「今帖」撰述へと赴く強い動機である。

而、末代行者、全無<sup>二</sup>准知之旨<sup>一</sup>。仍今、書<sup>二</sup>置随分之准知<sup>一</sup>也。今此悟<sup>ハ</sup>、放<sup>三</sup>出<sup>テ</sup>離<sup>二</sup>儀軌文<sup>一</sup>、悟<sup>二</sup>教之本意<sup>一</sup>、尤有<sup>二</sup>其恐<sup>一</sup>。仍書<sup>二</sup>今帖<sup>一</sup>以備<sup>二</sup>糜亡<sup>一</sup>也。(三九ウ)

本書は、以上の本文に加えて、裏書注というべき記事がその中間に、ほぼ一丁おきに挿入される、特殊な書写形態を有している。その箇所は、前半の本篇というべき三種悉地法開悟に関する六箇の事項のうち、第一の「真言事」の最後の部分(二二オ)から「毗盧遮那」別行経」の引用に始まる(菩薩衆の讚仏偈の十五字真言)一節において、慈円は「(この真言に)籠<sup>二</sup>納<sup>一</sup>三世十方一切真俗<sup>二</sup>二諦<sup>一</sup>、万法甚深奥旨、併覚知了。」と領解する。これを三種悉地印の至極とし、その解文を示して、次のように述懐する。

学者、見<sup>二</sup>此印解文<sup>一</sup>、更不<sup>レ</sup>立<sup>レ</sup>目、不<sup>レ</sup>入<sup>レ</sup>心。悲哉々々。覺者見<sup>レ</sup>之、誠分明也。不覺見<sup>レ</sup>之、如<sup>二</sup>闇夜<sup>一</sup>。有覺不覺之差別、以<sup>レ</sup>之可<sup>レ</sup>知哉。為<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>發<sup>二</sup>准知之智慧<sup>一</sup>記<sup>レ</sup>之耳。(一七オ)

その上で「取<sup>レ</sup>詮案云」と要点を整理し、尊勝陀羅尼と三種悉地真言を並べて位置付け、前者を大呪、後者を小呪とするは「浅略」で、その逆を「深秘」とする。それを「例<sup>ハ</sup>、世俗和哥<sup>ニ</sup>、如<sup>レ</sup>云<sup>二</sup>長哥短哥<sup>一</sup>。」と、和歌の長歌と短歌の関係に譬えるのは、いかにも歌人でもある慈円ならではの認識といえよう。

同様な裏書は、更に続いて(一九オ、二六オ)にまたがって記され、これも三種悉地の印明についての開悟を示した注である。その結論は次のようにある。

然則、尊勝者、是大日如来已証之身也<sup>ト</sup>深開悟<sup>シテ</sup>、誦<sup>二</sup>大陀羅尼<sup>一</sup>、持<sup>ニ</sup>シテ<sup>一</sup>三種悉地<sup>一</sup>、早出<sup>二</sup>於真言門<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>至<sup>レ</sup>于<sup>二</sup>仏地<sup>一</sup>蓮台<sup>一</sup>也。二尊同身之覺地、具以<sup>レ</sup>此、努力<sup>レ</sup>。(二六オ)

④(三種悉地<sup>摩訶</sup>至極) 第三〇箱一三号、横帖袋綴一冊、墨付三九丁。

表紙左外題「三種悉地<sup>摩訶</sup>至極」、同右下識語「伝領金剛尊純」、初丁内題「三種悉地法」。内題に続いて、著者慈円による、三種悉地法の創修についての経緯が、次の如く簡潔に記される。

承元三年十二月、賀陽院御所被<sup>二</sup>立直<sup>一</sup>之後、重可<sup>レ</sup>修<sup>二</sup>鎮法<sup>一</sup>之由、殊蒙<sup>レ</sup>仰之間、安鎮先訖、築垣等如<sup>レ</sup>元、不<sup>レ</sup>能<sup>二</sup>重<sup>一</sup>修<sup>一</sup>。仍以<sup>二</sup>今法<sup>一</sup>修<sup>レ</sup>之也。(一オ)

以下、本文は、この慈円が新たに創出した法の実修の経緯を、より詳細に記した「三種悉地法」条(二オ)<sup>3)</sup>に始まり、「修法常途儀式」(三ウ)でその実修の次第を注を加えつつ記し、次に「札書様」(一〇ウ)に、この修法で門屋に打つ札に書く三種悉地真言を図を交えて示し、次に「注

進」(一一才)、「卷教」(一二才)、「本尊曼荼羅」八大菩薩梵号「(一四才)、「今度助修十二人交名」(二四ウ)、その後、「浅才、聞此法」、成二疑問一云」として五箇条の問答を設ける。その問いの中心は、此を三種悉地法と名付ける、その「心」を説明することであり、これに「答者」の「開悟」と「覚知」を以て示す。次に「今度御修法啓白詞等」(一九ウ)

は、自草の表白全文を載せ、これを「奉行権弁(藤原)宗行」が聴聞すると共に「令<sup>二</sup>奏聞<sup>一</sup>云々、仍書也」と院に奏上した。次に「三部卒都婆印持、対受記為<sup>レ</sup>本」(二二才)に、三種悉地印真言の経軌の典拠を示し、その「心」の意義を明かす、本書の最も核心的な「深秘」の段である。最後に行者が四種印を加え結ぶことを「甚深不可説」未曾有々々々事也」と強調、以上を書記することについて、「如<sup>レ</sup>此載<sup>一</sup>筆端<sup>一</sup>書留了。有<sup>レ</sup>恐、有<sup>レ</sup>憚。賢者聖人、已誹謗、返々難<sup>レ</sup>遁事也。」「付<sup>レ</sup>之、思<sup>二</sup>自身之器量<sup>一</sup>、猶不足有若亡坎、可<sup>二</sup>思知<sup>一</sup>々々。只以<sup>二</sup>此結縁<sup>一</sup>、期<sup>二</sup>当来之僧過<sup>一</sup>耳。」と、畏れを懐きながらも記述への強いうながしを吐露する。以下、この法の典拠を「尊勝破地獄法四本」(二九ウ)に示し、依用した「桂林蔵三昧阿闍梨自筆本」以下四本の儀軌の広略四本について、その題と奥書を列記し、そのうち広本にある「殊説<sup>三</sup>三真言功能<sup>一</sup>也、其文云」として本文を引用する(三三八才)。最後に、それら異本の生ずる由来について問答一箇条を加え、「一本而不<sup>レ</sup>捨、悉全以之金言也。一宗旨足、在<sup>二</sup>最尊而最勝<sup>一</sup>也。三密之肝心、無<sup>レ</sup>外者坎。」と結ぶ。

総じて本書は、慈円の最も創意に溢れた新たな修法の創成が、周到な文献の基盤に支えられた、配慮に満ちた創造の営みであった内実を詳細に記録している。慈円自身の奥書はないが、奥書の成源書写識語の前に、「本云、元仁<sup>(三三五)</sup>月<sup>(三三六)</sup>十日書写了、一交了」の、慈円没年にかかる本奥書があり、更に「仁治<sup>(三三九)</sup>年<sup>(三四〇)</sup>正月四日、以<sup>二</sup>飯室御房御書写本<sup>一</sup>、於<sup>二</sup>法雲房<sup>一</sup>書写了。一交了、成源。真御皮子。」と成源が「飯室御房」すな

わち良快の書写本により「真御皮子」から写した旨を示す。これは「三種悉地記<sup>至極</sup>」と共通し、おそらく両本一具として成立し伝えられたものである。

### ⑤(葉師記<sup>私</sup>(未聞極秘))第六六箱二号、横帖袋綴一冊、墨付八丁。

表紙右外題「葉師記<sup>私</sup>」、同中央「未聞極秘」、同右下「全宗」書写者識語。内題「葉師私記<sup>秘中深秘</sup>」。本書は、奥書によれば、建暦三年(一二一三)正月二十七日、「御本」を賜わって同二十九日に慈円門弟の全宗が書写したものである(なお、六六箱四号に同本を蔵する)。内題に続き、「穴賢々々、勿<sup>レ</sup>令<sup>レ</sup>見<sup>二</sup>非機之人<sup>一</sup>、努力<sup>レ</sup>」の識語を加える。

先ず葉師法の次第を掲げる。その次第に沿って、「如<sup>レ</sup>常」や「但有<sup>二</sup>秘決<sup>一</sup>」などの注記を加える。その後、「右所<sup>レ</sup>記、常行法之中、所用之替目也。守<sup>二</sup>此趣<sup>一</sup>、甚深可<sup>レ</sup>修<sup>レ</sup>之也。其心、以<sup>二</sup>問答<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>之也。但、今案於<sup>二</sup>義理<sup>一</sup>、定難<sup>レ</sup>得<sup>二</sup>其心<sup>一</sup>坎。仍、粗記<sup>レ</sup>之。」(二ウ)と、著者による問答を設けて、その修法の「替目」について甚深の趣を示す旨の識語を加え、以下、三箇の問答(一「今所用心如何」、二、日光・十二神将等を護摩本尊段に請すべきか、三、頂上光明真言と十二神将・日光等を強ちに用うべきか)を設ける。総じて、葉師が積尊滅後利生の法身として真俗の病を治す仏である故、内外五輪印は必ず用いるべく、三身即一大日の法身である深秘の如来と開悟して共に用うべきこと、如来の名詮自性が頂上光明真言であり、その利益衆生の用が日月十二神とし、所具の身として別に非ず、「三種悉地之本有之真言」を以て十悪無明の病を治す故に一具と心得る、という。加えて葉師行法について「先達口伝」にこれらの趣を聞かないが、教文を開悟すれば、「阿闍梨之功惠」を以て本とする、と主張する。(伝教)大師が根本中堂に葉師を安置したのも、その証を得た心を悟る故に(此を)記す、と言う。但し、証に

つては「不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>載<sub>二</sub>文言<sub>一</sub>耳」とする。以下、次の著作識語を付す（六オ・ウ）。

承元三年十一月 日記<sub>レ</sub>之。以<sub>三</sub>祐真闍梨<sub>一</sub>為<sub>二</sub>手代<sub>一</sub>、修<sub>二</sub>上皇御祈<sub>一</sub>之間、為<sub>レ</sub>令<sub>二</sub>彼人悟<sub>一</sub>、此心記而与<sub>レ</sub>之訖。 金剛仏子慈<sub>一</sub>記。

以下に護摩の次第を記すが、その本尊段について、頂上光明真言と法身真言、報身真言を用いるのは、「令<sub>二</sub>開悟<sub>一</sub>一起<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>此師説<sub>一</sub>也」（七オ）と、前の問答で示した「開悟」が反映される。

承元三年秋から冬にかけて、慈円は自ら創出した三種悉地法を後鳥羽上皇御所で実修するため、その用意に余念なかつた時期である。その間に、やはり上皇の御祈として薬師法を修し、門弟の祐真を手代（代理）の阿闍梨として御所に遣し修せしめたのである。その修法の本尊や真言には、当時の慈円が三種悉地法創案の過程で得た「開悟」が多分に反映されており、また、座主として自ら根本中堂の薬師を実際に検分した経験（『四帖秘訣』）もその背景に在るだろう。この法に籠めた甚深の意樂を、懇切に問答を設けて教示するところに、慈円の門主としての姿勢と並々ならぬ意欲がうかがわれる。

⑥〔北斗入三摩地<sub>私</sub>〕第八五箱六号一、横帖袋綴一冊、墨付二四丁。

表紙左外題「北斗入三摩地<sub>私</sub>」、同中央「秘」。内題は初丁「北斗入三摩地事」（同題の六号）は、同本の宝徳三年（一四五二）実助写本。本文冒頭に、「予、聊一念<sub>二</sub>開悟<sub>一</sub>、只一詞也。如<sub>レ</sub>此事、廃亡無<sub>レ</sub>術之間、同書<sub>三</sub>付<sub>一</sub>之。」の著者識語があり、この「一詞」の「開悟」を契機に本書が書かれた。その「御本」は、奥書の成源識語によれば、承元四年（一二二〇）五月二十二日に「西山御所御本」を以て吉水御房で成源により書写校合されたもので、これを更に建長五年（一二五三）に写した本である。

最初は、先師の北斗法行法の「秘事」（<sub>ヲ</sub>字変じて大日と成り、無所

不至の故に星宿と現ず）と、その入三摩地を炎摩天供のそれを用いる南師（安慶）の説を元に、その行者心上月輪観を金輪大日の変作として根本印を結ぶに、その印真言に随い、「一々生身」に変作した、その「委細行用」の次第を記す。その「一詞」とは、「大日<sub>二</sub>変作<sub>一</sub>了、此大日<sub>一</sub>身、金輪<sub>トモ</sub>北斗<sub>トモ</sub>同時<sub>二</sub>変作<sub>スルナリ</sub>。此詞也。」と明かす。以下、本書一篇はこの「一詞」の開悟について、北斗法の「私記」次第の上に問答を加えて、「予覚知」を言説化することに費される。

問答は、前半六箇条（三オ―一オ）で、その後に、今度創り出した「余行用」が「具可<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之」とされている。この行用次第のうち、「道場観」において殊に詳しく注記を加え、「抑、今道場、未開<sub>レ</sub>悟己心中<sub>二</sub>」（中略）凡、不<sub>レ</sub>限<sub>二</sub>今行法<sub>一</sub>、諸尊行法道場観事、尤可<sub>レ</sub>儲<sub>二</sub>随分開悟之詞<sub>一</sub>也。在<sub>二</sub>別帖<sub>一</sub>令<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>記<sub>一</sub>」（一三オ）と示すのは、おそらく『甚深

至極鈔（道場観一切行法）を指すのであり、最終的には承元四年（一二二二）に成った著作だが、既にこの時期からこの課題に逢着していた消息が知られる。次第は「後入三摩地」で了り、以後は「私記」の如しとするが、「内外五輪」を殊に外用の成就印明とする注に「別記」を示す点は、本書に先立つ『薬師記』との関連が想起される。

「已上、余行用如<sub>レ</sub>此」（一四オ）以下、後半は、この次第の觀念について種々の「不審」を三条に涉って列記し、逐次答える形で、その「入三摩地観」の要諦を示す。それは「一仏深行之本意<sub>ヲ</sub>開悟<sub>スル</sub>」ことで、「他仏浅略之義<sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>、而一切仏各別之利生<sub>ヲ</sub>令<sub>レ</sub>現之時<sub>一</sub>」、その功德は失せることがない。また、仏眼成身具足にその功德が今の三種悉地観に入り、その尊の成身に変作し三部合行するのが行者の本意として、「三部即<sub>一</sub>、不二而<sub>二</sub>」となる開悟を「深行之人所用」と再び強調する（二〇オ）。</sub>

最後に、その成身観の本尊図相（観念）について、「最勝仏頂形象」を参照しつつ、その図絵本尊の意義について説き及び、その道場観と共に、法花曼荼羅の虚空会を図すのに対比して、「案」は「彼帖」に記した、という。

承元四年は、慈円にとって誠に実り多い時期であった。それまでの永きに亘る探究とその実践の実現が、西山草庵での余暇を得て著述として一挙に結実する季に当たる。本書も、その一環を成す聖教として、あい前後して成った『蘇悉地経問答』、『秘経抄』、『法花別帖』等の間で、改めて位置付けられるべき著作であろう。

⑦〔五智〕 第六九箱七号 横帖袋綴一冊、墨付二二丁。

表紙左上に「五智」と書かれ、これを外題として書名と認定されるが、表紙見返に全体の内容に応ずる略目録が書かれ、それぞれが本文と対応する。「法華<sup>三意生身</sup>」（初丁）、「三部」（三丁）、「三身」（五丁）、「四種曼荼羅」（九丁、一六丁）と対応し、その場合「五智」は六丁にあり、本冊全体に冠する書名としては適切でない。表紙見返に「悉以最秘<sup>不可外見</sup>」と識語があり、総じて著者（ないし書写者）の覚書が表紙と見返に残されたものか。本文中（一一オ）に次の記がある。

建保六年（一二二五）七月七日八日両日之間、書レ之訖。／同五日朝、聊有<sup>二</sup>発心之旨<sup>一</sup>。／而六日巳時許、自<sup>二</sup>天王寺一告<sup>一</sup>送云。

四日辰時、御塔上第三層・五層等<sup>二</sup>鷹飛來、其後<sup>一</sup>或巽方、或東方去<sup>云々</sup>。

これは当時四天王寺別当であった慈円の日記であり、この奇瑞に先立ち、宿曜師の珍喜に占わせ、真俗二諦について吉凶を問う。その結果は七日に示され、修行法について未だ決せざるに、七日朝に「如<sup>レ</sup>此覚悟」あり、これを受けて、「予、法花法、生身廿一年<sup>ヨリ</sup>于<sup>レ</sup>今未<sup>二</sup>退転<sup>一</sup>」。今年己六

十四歳也。似<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>薰修一<sup>一</sup>欵（下略）と己の修行を回想、「年来覚悟次第也」として法花法五供養の「三種意生身」の文を思惟の契機とし「五智三身之観」に入り、そこで「開悟心、忽然当起之至也」と開悟した内容を巡る問答などを次第不同に書き付けた覚書が本書である。

続いて（一三オ）「毎年七月七日、必詠<sup>二</sup>七首和歌一<sup>一</sup>事、穀葉法樂牽牛・織女、而此日詠云」と七夕に法樂和歌を詠ずる習いを述べ、「秋の来て今日は七日の夕月夜入れば更け行く星合の空」とこの日詠じたのを、「如<sup>レ</sup>此法門等<sup>二</sup>入之時、以<sup>二</sup>此詠一<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>自受用身歌一<sup>一</sup>と解し、初春に詠じた「春の来て今日は七日の若葉をば摘みて重ぬる命なりけり」を「他受用身歌」とし、この二身を「不二而二」として互具するは、「倭詞、尤可<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>真言之本一<sup>一</sup>欵」と思い至り、故に記した、という。以上の二首は『拾玉集』に収められていないが、慈円にとって、「和歌之本意、如<sup>三</sup>自行之中<sup>二</sup>詠<sup>一</sup>化他<sup>一</sup>、化他中<sup>二</sup>詠<sup>一</sup>自行<sup>一</sup>也。存<sup>二</sup>此意<sup>一</sup>、歌人<sup>一</sup>和歌、必有<sup>二</sup>余勢<sup>一</sup>」（一三ウ）と、いかにも歌人らしく彼の真言行と詠歌との相即が説かれることは興味深い。

後、「去月十日」に陰陽師在宣入道が来り、「牛宿直日事」を問うに、その返答から牽牛織女二星和合義に想到し、三昧阿闍梨（良祐）の記に照して、「此観、自然愛<sup>租</sup>叶此秘説一也」と感ずる。以下、四種曼荼羅の不審について問答を設け、「深行」には成身印明を配すを一切に准知する、という。（一六丁以下）「同十二日」天王寺へ参詣の為、翌十三日は最上吉日の故に前日から行法を始め、「新宮」に通夜するに「自然有<sup>二</sup>此発願<sup>一</sup>」により深更より出發、寺へ着いて十三日寅一点より聖靈院、金堂以下へ入堂、「一々如<sup>レ</sup>存」で、同日出立し、夜には帰房した。再び新宮に通夜しており、これが慈円により吉水房に創祀した山王新宮、すなわち太子とも重ねられる山王十禅師社であろう。ここで感得したのが、「行法位四箇印明配意、四種曼荼羅事」であり、以下、後半（一六ウ）

一九丁)までは全て、この事に関する自問自答で終始する。その結論に、「真言教」の浅略・初心の行法は「深秘ヲ含容」行法也。覚ヲ知一宗本意一、立還テ搜レ之時、浅略最略之中ニ皆籠ニ深秘之正意一也。(中略)浅ノ中ニ知ニ深キ心一ヲ心也。為ニ智解ノ至極一也。」という。別当時代の慈円の天王寺と太子への深い崇敬と、霊告を支えた背景となる己の行法への思惟と開悟、その過程での詠歌との自覚的な融即など、やがて翠建保七年正月に天王寺で『難波百首』を詠作し、更なる夢告を得るに至る経過が克明に記録された貴重な聖教である。なお、承元三年に自ら創案した三種悉地法にも重なる、五智が四季土用や五方五大から万法の真俗二諦と陰陽和合の論理を支干と引合せて説くところは、宿曜師や陰陽師との交流と併せて慈円の学知の基盤を窺い知る格好のテクストでもある。

奥書の「嘉祿元年(一一二五)卯月廿四日午刻許、書ヲ写之一了」とは、慈円入滅の年であり、これを成源(『目錄』は「公源」と誤る)が「延応二年五月四日、以ニ飯室御書写本一」て写したとあれば、慈円の真実皮子を継承した飯室妙香院良快が自ら慈円の草稿を写した「御書写本」を、成源が写し伝えたと見るべきであろう。

⑧〔甚深至極鈔(道場観 一切行法)〕第八九箱三号、横帖袋綴一冊、墨付三七丁。

表紙左外題「甚深至極鈔」、同中央「道場観 一切行法」、同右下「伝領金剛尊純之」。表紙見返に、「文言頗非ニ如心之行一坎。但、道場之眼目也。不レ可ニ聊尔一々々々努力一」。の識語を書き付ける。最終丁(三七才)に「書本云ノ承久四年三月廿日、書レ之了。書始之後、経ニ多年一了。ノ金剛仏子、」の慈円著作識語を本奥書として掲げ、次いで、「以ニ尊教御本一書写了。ノ成源」の書写識語、更に裏表紙に「寛元四年後四月十七日、交ニ他本一畢。ノ成源」の、再度の校合識語を加えている。

冒頭に、胎金(両部)の大日を何れの界を以て本とすべきか、と問いを発し、三部蘇悉地大日を両部を兼ねる故に本として、更に兼ねる心を、理智、定恵、陰陽、天地、昼夜、男女等の二元相對の法が、十界を仏界(本尊・金)と九界(行者・台)に分つ如く、両者は互具にして一仏は多尊である理を、一仏一切仏の理により、「仏界無クシテ不レ可有ニ九界一、々々無シテ不レ可有ニ仏界」と、十界悉く無始本有常住の法にして自然法尔なることを蘇悉地大日が体现する、という。この認識を道場観の大事に適用し、己の所存を具さに抄す、その主題とする。

本篇では、密教修法に必須の道場観の本意を、顕教との対比の上で示し、密教は一向「従本垂迹」の教えで、深行の阿闍梨は此を一仏一切仏の心で実践する。それを、三部の行法では、胎は以字焼字の五輪成身、金は五相成身、蘇は四重印道場観にて行ずるとし、行法の分別、その心を委く述べて、金胎で従本垂迹と修因向果の順が逆となる、とする。とりわけ胎の無始本有の心仏を觀じ顯し、これを従本垂迹とするのは、「無文有義之悟」だという。これは、後述する『真言宗』の枠組を成す四句分別と重なり、慈円における顕密一体の理解をうながす鍵語となつている。「今教之深密、只可レ在ニ此一事一。」(一四才)とし、この義は『毗盧遮那』別行經』の文に多く覚知するという。これら台金蘇三部の要諦を道場観に則して「存旨、大略可ニ抄記一」(一六ウ)までが前半である。

中間では、両界行法の惣・別の道場観について、両界曼荼羅、如来、天部等の修法壇への勸請法を『義釈』本文等を引いて、「学者」はこれらの文に違い分別せず、「小僧」は後日これを見て一々にその文空しからず、分明に解した、と自讃する(二〇才)。以下、その具体例を挙げ、「今、故九条入道殿(兼実)ノ法性寺報恩院小堂円壇ニ八尊中ニ舍利塔安レ之」(二二ウ)と例を示す。これら道場観に関する「人師説」は、嘗て自らも覚悟しなかつたが、慈恵大師が慈忍に授けた熾盛光法のそれ

に思い合せて覚知される、とし、全ての法は、大日が体を改めず、諸尊の功德を行者の心に随い施与するものと仮定され、これらの深義は「別帖」に見るべしと注す。已上の事の趣は、「正師説」を参照すべきだが、「口伝」として文言に載せず、粗ら之を記す、と慈円による注記が続く、師が弟子に授ける法の習い、初心の行法の伝授の階梯が述べられ、口伝により師説の深意を伝え、「正意」に案じ叶う分は用いることを許せ、但し、そこで流毎に異説が生ずるため、今、この道場観の次第と「生起大概」を右に記すのだ、と著述の動機を明かしている（二七ウ）。

後半では、現在の学者の慢心と僻見に陥る罪を批判しつつ、特に重要な曼荼羅（仏眼、法花、北斗、尊勝、熾盛光）と本尊（一字金輪、不動、毗沙門、弥陀、薬師、釈迦）は一々に観念し、分明に（その道場観を）記し置くべし、と定める。なお、末学凡迷の為に問答を以て疑いを決すべし、と七箇条の問答を最後に設けて、「不審ノ目六」を詳かに書き上げる。最末の「重問」には、彼の「阿闍梨位深行観」の正しき所観の様こそ尤も書き顯すべきだと強調、重ねて、道場観に顯われる方は従本垂迹、入三摩地観は修因向果の方にして、両方は全く各別にして不二而二、「初、従本、後、修因」と要約して一篇を結ぶ。

以上の結論は、承元四年の⑥『北斗入三摩地』に示される「別帖」の内容に明らかに対応するものであり、この道場観の問題が、入三摩地と一対を成すものと位置付け、慈円の永きにわたる課題として探究し続けられていたこと、それが漸く、承元四年という、彼の生涯にとって大きな蹉跎であった承久の乱の破局の後に訪れた内省の時期に結実して一著を成した、そうした求法の軌跡を推察させる。

## 二 記述内容から慈円の著作であることが確実な聖教

### ⑨〔附法事御鈔事〕第六一箱四号、卷子本一卷、

表紙外題「附法事御鈔之内」、内題無し。奥書識語のうち、第一の本奥書は次の如し。

文永九年五月廿三日、以三慈鎮和尚御草一、抄出之。／老者之比丘法印大和尚位慈胤記之。

以下の三条の本奥書および最末の書写識語によれば、本書は、文永九年（一二七二）に慈円の門弟であった慈胤が、師の「御草」より「抄出したもので、更に建治二年（一二七六）に聡賢、元亨二年（一二三二）に定尋、文安三年（一四四六）に実印が写し、公助が伝領し、最後に大永七年（一五二七）に尊鎮法親王（青蓮院第二十六代門主）により写された、四転写を経た本である。

本文中に「予」と自称する慈円により、三昧流の伝流と継承を示した、その中核的な重書である、流祖三昧阿闍梨良祐が師説（北師—大原長宴、南師—井房安慶）より修習伝受した「厚双紙二帖」のうち、秘事とされた「切留八箇条」の名目とその由来（「子細」の物語）を、「末学如予末生」つまり自らの門徒らに示した記録であった。

後半には、「件切留（秘伝）子細」について、「故御房」行玄が良祐より伝受した際に、同宿の付法だった理覚が「サカシク切留」たものと明かし、良祐は後に知足院殿（忠実）に申請し、平等院三綱上座に昇進した、「是比門跡ノ物語也」という。この「切留」八箇のうち、「三種悉地」は切留めず、殊なる「秘事」とした、とする。

以下に、三昧流を相承した附法のうち、覚尋の流は断絶、頼昭の流は、行巖、覚範から院昭を経て、豪覚が青蓮院覚快や桂林院全玄の師として、「隨身甲乙皮子」聖教を伝え、これに一合を加えた三合を「予」が伝えたこと、以上の三流を「共留三吾一室」という。行玄はまた、最嚴や陽宴に「本書」を伝えたが、これも西山の観性を経て「予伝得之」、余巻を書き加えるに至った、と示す。

最後に「又、此門流ニ尤可ニ記置」物語、在レ之」と前置きして記すのは、この「青蓮院御房」行玄が、「真俗之執心殊深」い人であって、その終焉に臨み、例の切留七ヶ条を「小箱一合」に納めて、覚快ではなく、「寵人無双」だった行遍法眼に預けて遺誡した。覚快が座主を望む梶井宮最雲の弟子となり「切留小皮子」が他門に渡るのではと疑った故という。

この秘書皮子は、その後、行遍が先師の崇りを受けて病臥、閉眼の際に、全玄が居室の塗籠から取り戻し、封を付けて覚快到進上、その入滅の後に、慈円が全玄より灌頂を受けた時に付属された、と伝える。吉水藏第六一箱二号『七箇条』（正治二年吉水御所奉受、成円写本）は、その「切留七箇条」に該当する聖教かと推測される。

青蓮院において慈円が受法した三昧流諸流の聖教と、その中核を成す秘事についての情報を、それらを伝えた先師や周辺の人物のはたらきを含めて、慈円ならではの生彩ある語り口で記述した、貴重な記録である。

⑩〔真言宗私（真言御問答）〕第六〇箱一一号、横帖袋綴一冊、墨付二六丁。表紙左外題「真言宗私」、その右傍に「真言御問答」と傍記。表紙は更に「文句云／有文有義常人用之／無文有義智人用之／有文無義閻人用之／無文無義迷者用之」と、『法華文句』に拠る四句文が書かれ、慈円の依用する四句分別の典拠が示される。

本書は、巻頭に「帰命事理皆法身」から「覚者眼前莫披之」に至る七言十二句の偈を、末尾に「付無文有義」より「皆入阿字文」に及ぶ五言八句の頌を配し、以て序跋に宛てる。表紙に掲げた文句の四句分別を前提に、智人の為に、「已上、真言教宗義、大概如レ此。以レ之可ニ准ニ知一切一也。」（四才）と示す著述である。慈円の著作年次を明かす識語は無いが、奥書に、『本尊釈問答』（六〇箱一二号）と同年の元亨二年（一三三二）十一月十一日に「和尚御自筆本」を以て書写したという慈敵の

書写識語を有している。

全体は問答によって構成されるが、大きく前後に分かたれる。前半は、真言宗義の大概を、教相（三部、真言宗名の心、三密）と事相の浅略・深秘積、四重秘積について、先ず真言教の本意を真俗二諦、万法悉真言について、安然の説を依用し、その正説と邪説の差別を巡って善悪を問ひ、これを「善之善心／悪之悪心／善之善心／悪之善心」の四句分別を以て示し、後二句が常の人の心、とする。この答において、「余」の自称があらわれ、更に問を重ねて、印明について自他の正流の邪正を區別する「証」として、「多年行法、五供養印明」（『五智』に言及される）について述べ、三昧流の例を挙げている（これは『附法事』の記述と重なる）。その上で、「凡、真言教修行、当時所用三密之次第」を通じてその「正意」を示し、「悪之中悪」に墮さぬよう誡める。その上で、「已上、此宗大意是也。毎ニ学者、尤存ニ知此趣、可レ励ニ修学一也。」（一四ウ）と前半を結ぶ。

後半は、「此宗、殊秘事口伝」について、先ず「深義」と「珍重」の二種に分ち、その名目すら秘すものだが、「此抄記」に載せぬ訳にかず、今これを示して「明師説」を受けよ、と「秘法」として七仏葉師以下十種の法の秘事名目を掲げ、次に「教々大事」として胎藏三部大日、金界四種曼陀羅、蘇悉地根本印以下、七種の「最秘事」を挙げる。その上で、「已上、是等之中、所レ学者、皆深義大事也。其中、気味甚多、以レ之為ニ珍重」（一七ウ）と注す。これら台密の秘事口伝について、（当流の）学者の理非の存知を、以下に谷流および三昧流の伝授四箇条（灑水加持事）等）は他流の知らざるところとし、次に通行行法にも大事は多く、名目を示すことも用心すべきと述べ、最後に、それら師資の伝授は「一向取ニ捨邪正」、又以只在ニ機（器）量之浅深」（二一ウ）と説き、偏執するべからずと心得よ、と結ぶ。

天台の「真言宗」すなわち台密の要諦を、問答を柱として私注を加え、教訓を交えて解説した初心の爲の入門書と言うべき趣だが、そこに明かされる秘事口伝についての慈円独自の認識と、その名目から窺われる台密三昧流の体系観は興味深い。成立時期は不明だが、『五智』に連なる建保・承久の頃かと推察される。

①〔本末究竟深入鈔<sup>第三生起</sup>〕第六〇箱六号一、横帖袋綴一冊、墨付五六丁。

表紙中央外題「本末究竟深入鈔」、同左上「第三生起」。内題無し。

本書は、慈円による著作識語(五二才)に著作年代が記されない。裏表紙見返に、「寛元四月五月十一日、書改了。／即交合了。成源。／同御名筆等、悉交合了。」と成源の書写校合識語が付され、この成源識語は一具となる六号二「第四<sup>従本</sup>修因」と共通する。両本共に一筆で書写され、『三種悉地記<sup>至極</sup>』や『五智』と同筆であり、慈円の門弟として師の在世中は慈円著作の清書を担い、『慈恵大師講式』、『六道釈』等)、また多数の著作や手摺本(「実御皮子」聖教等)の書写を行った、岡崎僧正成源の写し伝えた慈円著作聖教である(なお、第一・第二も存在した筈であるが確認できない)。

本書「第三<sup>生起</sup>」冒頭には、序に相当する次の一文が置かれる。

就<sup>二</sup>阿闍梨位<sup>一</sup>、合<sup>二</sup>行三部<sup>一</sup>至極開悟、行法可<sup>レ</sup>存<sup>二</sup>生起次第<sup>一</sup>。知<sup>二</sup>如<sup>レ</sup>此生起<sup>一</sup>者、置亦可<sup>レ</sup>悟<sup>二</sup>一部心<sup>一</sup>。亦、行人成身所觀、真言行者行法心、教主説、教本意、同尤可<sup>レ</sup>存<sup>二</sup>知<sup>一</sup>。 (一才)

この意趣の下に、先ず「行者房中作法」の次第に則して、その一々の作法について、印明を始めとする各種の故実と行法の用心を、三部(台・金・蘇)に亘り、時に問答を構え、詳細に「其心」を注す形で本篇が記述される(以下、これを(A)とする)。

本写本は、その本文書写において、(③)『三種悉地記<sup>至極</sup>』と共通する)

独特の形態を示す。すなわち、上記の本篇にあたる(A)に対して、(四ウの白紙を置き、五才から)「此以字焼字觀、行者觀念之間、詳否頗其領解如何。一々開悟也。」等と、その本文や主題について「一々問答、可<sup>三</sup>決<sup>二</sup>定<sup>一</sup>之。」と、五箇条の問答が設けられる(二二ウ「已上」まで)。それが本写本ではおよそ二丁おきに、一丁の表裏にわたり長短の問答が記され、最後に、「此問答之上、精義者、乍<sup>レ</sup>修取、以<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>結成<sup>一</sup>。 (二〇才)として結論に至り、「是則、従本垂迹之成身也。(中略)而今、縱深<sup>二</sup>入末法<sup>一</sup>、行証雖<sup>レ</sup>失<sup>二</sup>所執<sup>一</sup>、何亦臨命終後、生々不<sup>レ</sup>赴<sup>二</sup>吾界<sup>一</sup>哉、已上。」(二二ウ)と本書の主題を示唆するが如き表白に至る(この問答を(B)とする)。本篇の(A)に対してこの問答(B)が交互に規則的に挿入される現象は、慈円の本書撰述にあたり、まず(A)が袋綴の冊子に書かれ、次にその小口を切り開いて生じた裏面の白丁部分に、逐次、(A)を著す過程で生じた疑問を「領解」するために問答の形で思惟を重ねる過程で、そのテキストを書き入れていったことで生じた現象ではないかと推考される(但し、(A)と(B)とは、現写本では、必ずしも全く規則的に交互に配される訳ではなく、途中で多少の混乱が生じており、なお内容所説に則した分別が必要である)。

本篇(A)では、「行位」の作法において、「須要也、大切也。不<sup>レ</sup>悟<sup>二</sup>教之本意<sup>一</sup>之時、未<sup>三</sup>曾有<sup>二</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>一</sup>發知<sup>一</sup>也。令<sup>レ</sup>書<sup>二</sup>知此深意<sup>一</sup>、何黙止哉、学者可<sup>レ</sup>知矣。」(二六ウ)として、「為<sup>レ</sup>悟<sup>二</sup>此心<sup>一</sup>也、用否、如<sup>二</sup>上注<sup>一</sup>」と、その際の五大虚空藏以下の「四箇印明」を詳細に解釈する(「已上、經文所載之功能、如<sup>レ</sup>此。今、就<sup>二</sup>如<sup>レ</sup>此<sup>一</sup>説<sup>一</sup>、以<sup>二</sup>行者淺智力分<sup>一</sup>、大切之淺近觀、作<sup>二</sup>一法<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>之。」(三一才)。この中には、「仁和寺御室(守覚)師説」も参照されており、「雖<sup>二</sup>他流説<sup>一</sup>、尤足<sup>二</sup>依用<sup>一</sup>」と評価していることも注意される。その最後に、「上四印明、生起次第如<sup>レ</sup>此。惣取<sup>レ</sup>詮謂<sup>レ</sup>之。」(三五才)と簡略に要点をまとめて前半を了える。

後半は、同様に「道場観」段に裏書が挿入される（これを(C)とする）。「惣、以一切行法道場観、返々、能々可レ得<sub>二</sub>其心一事也。」と言及されるのは、前述した『甚深至極鈔』を指すか。いまだ師説にその「正意」を伝えないその心を、「不<sub>レ</sub>可<sub>二</sub>默止<sub>一</sub>、以<sub>二</sub>発智之子細<sub>一</sub>、重試所<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>記也。」として始められる。更に続けて、「於<sub>二</sub>此条<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>仮<sub>二</sub>問答詞<sub>一</sub>、直可<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>之。不<sub>レ</sub>記<sub>二</sub>由来<sub>一</sub>者、不<sub>レ</sub>審猶殘<sub>二</sub>行法<sub>一</sub>之間、觀念之至、大事之至極也。上智之最深也。仍、愚詞瀝心而已。」(三七オ)という、自身による重要な「発智」のテクスト化を、通常の問答形式に拠らず、敢えて直語として叙述する意義について識語を加えることが注目される。

この(C)道場観に関する裏書は、(A)の以字焼字法と同じく慈円にとつてきわめて肝要な課題であった。これについて、永年にわたり「此惣之教文、別之文証<sub>三</sub>乍<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>奉<sub>三</sub>不悟<sub>二</sub>此深意<sub>一</sub>」(四六ウ)と述懐し、仏眼行法により、一切の別尊法の全ては悉く大日の従本垂迹の相であると覚悟したことから、「一切行法之本、四種曼荼羅之証、真言行者之諦観、従本垂迹之目足也。」(四六ウ)と、その深意の領解の意義を示している。その上で、次のようにその感慨を自讃を籠めて吐露する。

余、年来、一切道場観、疲<sub>二</sub>思慮<sub>一</sub>、迷<sub>二</sub>覚悟<sub>一</sub>待<sub>レ</sub>リキ。今、幸有<sub>二</sub>決之智<sub>一</sub>、可<sub>レ</sub>謂<sub>二</sub>五十年來行法薰修之力<sub>一</sub>也。後生増進、弥有<sub>レ</sub>憑者坎。(四七オ)

これにより、本書の著作が、慈円の受法入壇した嘉応二年(一一七〇)より五十年後、すなわち承久年間前後であることが推定される。また、この道場観を主題とした一帖(『甚深至極鈔(道場観一切行法)』)は、承久四年(一二二二)に成っており、これと前後する成立を想定できよう。右の識語の後には、「如<sub>レ</sub>例、聊<sub>二</sub>問答<sub>一</sub>可<sub>レ</sub>決<sub>レ</sub>之」と、再び問答二簡条を設けて不審を明かす。

本篇(A)の最後では、行法次第の末に、本尊成身印明を結誦として、後

入三摩地に根本印を以て悉地とし、「所詮、何<sub>モ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>相<sub>三</sub>違本書別尊等儀軌文<sub>一</sub>、以不同也。皆在<sub>二</sub>其心一<sub>レ</sub>坎。能々可<sub>二</sub>心得<sub>一</sub>也。」と教示し、続いて、「凡、真言行者供養法之用心、一々<sub>レ</sub>分別作為、併浅略深秘<sub>二</sub>心<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>兼也。聊<sub>モ</sub>無<sub>二</sub>分別<sub>一</sub>。聊<sub>二</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>存々々々<sub>一</sub>。」と締めくくる。その下に次の著作識語を記す。

於<sub>二</sub>此一帖之行法之至極<sub>一</sub>、一宗之肝心也。輒不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>授<sub>レ</sub>之。

金剛仏子、在御名記(五二オ)

この識語の署名部分「在御名」は、成源の書写校合識語に「同御名筆等、悉交合了」に対応し、本来は慈円の名が記されるべきところだろう。『第四従本修因』と共に、最晩年の慈円の聖教として、生涯の修法実践の求法がもたらした「決智」を記した、集大成というべき著作である。

⑫〔本末究竟深入鈔第四従本修因〕第六〇箱六号二、横帖袋綴装一冊、墨付二六丁。

表紙中央外題「本末究竟深入鈔」、同左上「第四従本修因」。内題無し。本書は、第六〇箱六号一『第三生起』と一具を成す。本冊に慈円著作の識語は無い。奥書に、「寛元四年十月十五日、書改了。／即交合了。成源」の書写校合識語を付す。本文も同筆で、『第三生起』一冊と合せて、成源による写本である。

本書は、全体が問答によって構成され、その最初の問いが導入の役割を果たしている。「今、行法生起成身次第<sub>三</sub>云<sub>ク</sub>。初<sub>メ</sub>、従本垂迹成身也。後<sub>ノ</sub>、修因向果成身也<sub>云</sub>。今義、同有<sub>二</sub>教時義<sub>一</sub>。更非<sub>二</sub>今案<sub>一</sub>。今、就<sub>二</sub>此意<sub>一</sub>、疑<sub>云</sub>。」(一オ)と、慈円自身の「今義」が「今案」なるかを疑う。以下、それを具体的に長文の不審を挙げ、「此一々生起分別、可<sub>二</sub>令<sub>レ</sub>答給<sub>一</sub>也。」(二オ)と提起される。ここで前提とされる「行法生起成身次第」とは、『第三生起』を指すだろう。そこにおいても記し切れない多くの問

題を、具さに「別帖」に書くことが示されていた。それが本書に結実したのである（なお、本書の問答中でも、「別帖、如三具記」(第二〇問答)のような指示が見える)。

本篇は、先ず、長短三十一箇条の問答が連ねられて、一旦は「已上、問答了」(一七オ)と結ばれるが、ただちに追加の問答が開始され、十箇条を数える。これも「已上問答了」と結ぶ。この後の、本書の結論に相当する付記(二二オ〜二五ウ)は、行者による行者の実践について、問答をふまえて、陰陽師の祭や宿曜師の星供とは一線を画する、密教の法の浅深をよく習い伝え、弁えて知るべき要諦が記され、大日以下五尊の星供における「本書文」や、熾盛光などの三箇法を殊に秘法とするべき用意について述べられ、その浅深とは、「無文有義之智人」ならでは行法の首尾を知らずと、「近來行者」の風儀を批判し、「都法深秘行者」の功惠にその成就を期している。ここにも「文句」の四句分別が言及されるのは⑩『真言宗』との関連を想起させる。以下に本書を著す意図が叙されるが、その詞は、紛れもなく慈円その人のものである。

其詮至極、大略私底記<sup>レ</sup>之訖。此上、何不審之有哉。学者、必、谷・大原私記以下、必令<sup>二</sup>披見<sup>一</sup>。可<sup>レ</sup>儲<sup>二</sup>分別作意<sup>一</sup>因縁狀。大師御作、<sup>(安然)</sup>五大院尺、一具<sup>トシテ</sup>可<sup>三</sup>見<sup>二</sup>合此抄<sup>ト</sup>矣。有<sup>二</sup>違失事<sup>一</sup>者、必聞<sup>二</sup>其趣<sup>一</sup>、可<sup>レ</sup>記<sup>レ</sup>之在<sup>一</sup>者也。(二五ウ)

### 三 法華法関連文献

慈円は台密谷流のうち三昧流正嫡を自認し、派祖・流祖である良祐・皇慶からさらに慈覚大師円仁・伝教大師最澄にまで遡る天台僧としての意識はもとより強かった。その立場から『法華経』を位置づけようとする試みも終生続けられたのは当然であろう。

『溪風拾葉集』には、如法佛眼・如法尊勝・如法法華・如法北斗の四

箇の修法を「准大法也」といい、大法の時は大壇・護摩壇・十二天壇・聖天壇の四壇を立てるのが一般的であることを述べる。同時に、「法華法二モ三昧流ニハ立五壇、所謂三壇ハ如前、山王壇ト十羅刹壇ト加也云云」と記し、とくに他とは異なる法華法の特徴を述べている。<sup>(5)</sup>この点には後に触れるが、中世において台密で重視された法華法の発展の起点に立つ人物として、慈円の存在は非常に大きい。

とくに、青蓮院吉水藏聖教第六九箱には、法華法関係文献が集中している。ここでも第二節までの原則に倣い、著作年代が識語等により明らかな聖教および、記述内容から慈円の著作であることが確実な聖教を簡単に紹介していく。

また『法記等』(六号)は同じく(上)所収の「吉水藏聖教の慈円関係聖教」「慈鎮御筆本」「実御皮子本」「一覽」に示している。以下、かならずしも目録の順番には沿わずに問題を付してみた。

なお、『五智』(七号)も書名に関わらず内容は法華法に関する記述が大半であるが、第一節に別に取り上げている。

⑬〔法華法日記〕五号、折本装一帖(もと卷子本か)。

建保二年(一一二四)正月十六日より一七日間、延暦寺根本中堂において後鳥羽院御惱祈禳のため始修された法華法の記録である。このときの記事は『華頂要略』や『阿婆縛抄』などに詳しい(『大日本史料』四一―一三、同日条)。しかし、本書の所引記事は諸書には見当たらず、これらの編纂には直接利用されなかったらしい。とくに『阿婆縛抄』の方は結願関係の記事が中心であるのに対し、こちらは慈円自身も臨んだ開白の日を中心に、諸書には見えない詳細な情報に満ちている。

一例を示せば、『華頂要略』(一一二〇)には「助修三十二人(僧綱十六人、凡僧十六人之内、以二僧綱以下二十人」為二伴僧一、以二凡僧十二人

為「不斷説経衆」<sup>二</sup>と見えるが、本書にはその交名が記される。また、先ほども『溪嵐拾葉集』から示しておいたように、三味流では准大法の法華法に五壇を立て、そのうち三壇は大壇・護摩壇・十二天壇で、あとの二壇は『法華経』の守護神である十羅刹壇と山王壇であるという。これは極めて特異で、慈円の創案になるものではないかと思われる。ともかく本書では「小壇」として『溪嵐拾葉集』とはやや異なり、十二天壇・多聞天壇・持国天壇・十羅刹壇・聖天壇の五壇をまず立てる。さらに「又一壇在<sup>レ</sup>之」と記され、それらの舗設の説明の最後に「別ノ一壇蠟燭十五位居<sup>レ</sup>之、図如<sup>レ</sup>右（幣帛十四本置<sup>二</sup>脇机上<sup>一</sup>）」とだけ記されて、その配置と数字などの略号が図示されている。これだけでは、じつところ何のための壇なのか分からない。しかしそれは秘説だから注されなかつたのであり、『法花別帖』所収「山王壇」の図や記述とほぼ一致する。<sup>6</sup>

なお、同じ書名の『法花法日記』（第七二箱―一四号）は、先だつて承元二年（一二〇八）五月にやはり後鳥羽院のために修された法華法の記録であり、（上）にも触れた通り法勝寺九重塔落雷炎上の記事などが興味深い。ここで取り上げた建保二年の『法華法日記』にはこのような記事は見えないが、たんなる次第書ではなく、先行する儀軌を引用しながら個別の儀礼の意味を考察した箇所も多い。いずれにしても慈円は、大掛かりな修法の際にはしばしばこのような修法日記を残していた。

⑭〔法華法行法抄〕 四号、枳形袋綴装一冊、墨付二二丁。

建保二年の法華法は延行され、結願は二十三日であったが、奥書によれば、そのすぐ後にあたる二十七日、ある人物がおそらく慈円より「賜<sup>二</sup>御本<sup>一</sup>書<sup>レ</sup>之了」のが本書である。その内容は、冒頭に「一、行法事」として「此行法説家多之、以<sup>二</sup>何次第<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>之耶」から始まり、次第

書というよりはなかなば問答形式で詳しく儀軌を解説している。また奥書の最後に「覚超僧都台蔵記云、初心行者多好<sup>二</sup>博覧<sup>一</sup>、如<sup>此方</sup>□人、先当<sup>レ</sup>警<sup>レ</sup>見一仏・二菩薩」（後略）ともある。してみると、慈円がこの書の書写を許した相手は初学の弟子であった可能性が高い。それは誰であろうか。

⑮〔法華私新記〕 九号、横帖袋綴装一冊、墨付二二丁。

そこでつきに見たいのが本書である。まず表紙外題には、「初心者秘本也」とある。同じく本奥書からは、承元四年（一二一〇）八月二十日、「未入壇初行人」に修せしめんがために慈円が草し、具体的には聖増に与えられたことが分かる。その後、奥書によれば元仁二年（一二二五）春に東山で道覚が、さらに文永九年（一二七二）極月、大原で公澄が転写している。内容は法華法の次第をアジェンダのように書き連ねただけで、むしろ個別の作法の意味や説明は意図的に省き、簡略化して覚えやすいようにしている如くである。

この約一年半後に行われた先述の建保二年『法華法日記』によれば、三二人の助修のうち、凡僧の最末は聖増であった。するとあくまで仮説にすぎないが、『法華私新記』もまた、聖増のために書かれたものではなかつたか。聖増は隆寛男で横川長吏・後深草天皇護持僧などを務め、「今日朝夕不動供養法、（至<sup>二</sup>来廿九日<sup>一</sup>可<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>之）」横河長吏権僧正聖増来、隔<sup>レ</sup>簾言談、件僧未<sup>二</sup>三人<sup>一</sup>来一人也、而今日初来、智徳当世名誉<sup>レ</sup>者也<sup>7</sup>と言われている。慈賢資で後康楽寺僧正と呼ばれ、慈源からも受法していたが、さらに若いころには慈円からも直接教えを受けていたことが分かる。のち慈賢が管理し道覚に譲られるべきだった慈円の「隨身皮子秘書」他、門跡の相承に関して相論となり、聖増は師の慈源のもとで一部聖教紛失の疑惑に巻き込まれた<sup>8</sup>。

⑩『法華別帖』 一三号、横帖袋綴装一冊、墨付一〇丁。

『法華別帖』については、『毘逝別』や『慈鎮和尚夢想記』に見える三種の神器の秘説と関連する思想的背景が語られている他、慈円の夢の記述が豊富であることに加え、長期にわたって書き継がれていることから伝記を考える上でも重視されてきた。詳しくはそちらに譲るが、『続天台宗全書』（密教3）に翻刻収録されたことよって、その全文も知られるようになった。吉水蔵聖教本は、成源が慈円から与えられて書写した本からの転写である。

三崎良周が指摘するように現状に錯簡があるのは明らかで、正確なテキストの復元にはいまだ一考を要する。この点をさらに難しくしているのが、本書のもつ独特の体裁である。これについて三崎は「裏書が極めて多く、元は軸本であったものを、帖本に書写して以後、乱丁したよう<sup>10</sup>だ」と指摘している。現状は袋綴装の小口（折山）を切り、その裏面にテキストが補写されている部分が多いことからこのように考えたのである。しかしこれは、おそらく慈円独自の書写・製本の方法であり、必ずしも軸本を帖本に仕立て直した際の錯誤というわけでもないようである。これらの構造の連関を示すために随所に朱で丸印を付しているが、現在のところその意味を完全に理解できておらず、引き続き機会を得て正確なテキスト復元を進めたい。

もう一つ注目しておきたいのは、本書の書名に関わる問題である。これについて三崎は不空訳『成就妙法蓮華経王瑜伽観智儀』（大正蔵一〇〇〇、第一九卷所収）を本説とする成尋『法華法私記』（散逸）を多く引いていることを指摘し、これに私案を加えて「別帖」と称したものであるとする。本奥書には成源が慈円から「法華三帖」を給わったと見え、諸書の影響関係についても三崎の指摘の通りであろう。おなじく『法華別帖』の本文中には、「三昧阿闍梨二ノ帖<sup>12</sup>」すなわち良祐撰『自行次第』

二帖（六〇箱三号）をたびたび引く。正治元年（一一九九）、慈円は吉水坊で、良祐の製記として「以<sup>11</sup>此私記一可<sup>11</sup>行用也」と仰せて<sup>11</sup>□快に賜り書写させた。六〇箱一五号は本末二帖を完備する。あるいはこの『自行次第』を本帖として『法華別帖』を記した可能性もある。

ただし両者ともに、最初の方に「正修次第」との内題を持つ作法の次第を載せるが、『自行次第』は法華法に特化しているわけではない。かつ、すでに第一節で触れているように、「三種悉地記<sup>13</sup>」（第六一箱一号）には法華法は慈円自身の「開悟法」として「三帖」に記したと見える。やはり、山王壇の秘説を大幅に盛り込むことをはじめとして「私」の解釈をふんだんに加えた『法華別帖』のほかに、法華法に特化した内容の「本帖」二帖があり、いまは失われたと考えるのが妥当だろう。

おわりに 吉水蔵慈円著作聖教の輪郭

以上、一六点到及ぶ慈円著作聖教について、略解題によりその概要を示した。これらの知見から、将来に期す慈円著作の全体像の解明に資する為、明らかにしたその特質を摘記したい。それは今後の、歴史学はもとより、宗教、思想、文学を越境する、知の巨人としての慈円の総合的研究の基盤を提供することになるであろう。以下、本稿では紙幅の制約もあり、宗教テキスト創造者としての慈円の所産について、基礎情報<sup>14</sup>の概略を記すにとどめる。

第一に、慈円著作聖教の独特な書誌的特徴について指摘する。吉水蔵に伝来する慈円聖教は、（既紹介の四点を含めて）卷子本の『附法事』一点を除き、全て横長の袋綴冊子本であり、それは原本たる慈円自筆本に遡っても同形態であったと推測される。袋綴の「双紙」であることにより、『三種悉地記』や『本末究竟深入鈔』の如く、慈円自筆本の段階で、

その小口を切開いて生じた紙背に更に著者によりテクストが書き加えられた。その裏書注の形態が、吉水蔵本ではそのままに袋綴冊子に再現されて写されているのである（第三節の『法花別帖』で菊地が指摘する問題と共通する現象であろう）。また、表紙には外題が複数書かれる場合が多く、一具としての題と、その一帖のみに付される題と、慈円自身による命名の輻輳した経緯が想定される。

第二に、慈円の全著作とその生涯の事蹟に、これらの聖教著作を位置付けることにより、慈円研究に新たな展望と視界が開かれることになる。特に、密教僧としての慈円が、台密法流と聖教および秘事の相承の主体としての認識を生々しく記す『附法事』と、成立年代が知られる各新出聖教に籠められた意図やその見解が示す情報は、貴重な材料を提供する。建永期における、大懺法院建立に伴う、『起請』と呼応する）大懺盛光法の十帖一具の聖教体系構築と、その核心たる『口決』『秘』の秘伝説が開示するのは、まさに懺盛光法本尊と修法の本質であった。承元期の西山隠棲時における、大量の集中的な聖教著作の全貌が明らかに、その頂点というべき三種悉地法の創成と、それが後鳥羽院の御願として実修された経緯が知られたことは、重要な事実である。その間には「厭離欣求百首」が詠まれ、以降、承元四年にかけて、既知の四点の主要な聖教（『毗逝別』、『蘇悉地経問答』、『秘経抄』、『法花別帖』）が続けて成り、その後、今回紹介した聖教を含む、全十三点に及ぶ宗教テクストが一気に著されている。それは、驚くべき収穫の季<sup>14</sup>であった。その結実の象徴が、承元四年三月に成った『秘経抄』の識語として書きつけた、慈円による、上皇と自らが夫妻の儀を成し、その寵はなはだしかった、という（「陰陽加持成就」の）<sup>14</sup>夢想であったと思われる。

再三・再四の座主を勤めた建暦・建保期の末、再び天王寺別当となった慈円が、吉水と天王寺を往還する、建保六年七月の日記というべき『五

智』は、懐成親王の立太子に至る、慈円の聖徳太子と（山王）新宮への祈願を、自身の顕密の思惟と七夕法楽詠歌に絡めて記すが、やがて翌年正月に天王寺の太子宝前で『難波百首』を詠み、太子の夢想を蒙るに至る過程が知られる。承久期には、懐成即位、九条摂関家復活の為、その真俗に亘る根柢と祈願を『道理』と『本尊釈』に託し、その延長上に、吉水蔵『本尊釈問答』が著された。そこから散佚した両書の内容も推察され、また吉水蔵に遺る『本尊縁起』との関連や、更に承久二年秋の『愚管抄』成立に至る過程が明らかにされている。<sup>15</sup>その後、惹起した承久の乱は、慈円の希った理想を崩壊させ、挫折に追いやったが、彼は、なお『大懺法院再興願文』や『聖徳太子・十禪師告文』等、更なる仏神への祈願を止めることはなかった。乱後には、二十五三昧会を始め、『六道釈』を草して、現世を六道と観じつつ念仏と法華による救済を祈る。<sup>16</sup>その一方で、自ら生涯に亘り探究し続けた密教（真言宗）の中心的課題について、集大成をなす著述が、『甚深至極鈔』、『本末究竟深入鈔』として次々と著された、その中には、来し方を回顧する記述も多く含まれる。この最晩年における旺盛な著述は、願文等と併せて、慈円の終生止むことの無い精神の運動をよく伝えている。

第三に、これらの聖教を通じて、その宗教テクストとしての共通する特色が鮮かにかがびあがる。それらは、基本的に「仮名書」（『蘇悉地経問答』識語）の文体で書かれる。一見漢文と見えながら、訓み下しにすることで和文として書かれた、（和漢混交文とも呼ばれた）中世仮名法語の原形ともいえよう。その本文は、大半を占める台密聖教では多く「行法」の次第、つまり「私記（式）」を土台として注を加える、儀礼テクストにもとづく注釈である。更に、必ず問答を設け、自問自答によって思惟を深めていく、自覚的な方法を用いる（敢えて問答の形式を「仮」らず、直叙することを表明する『本末究竟深入鈔』の一節がその意図を

反語的に示している)。のみならず、一旦本文が書かれた後、(上述の如きテキストの装丁と料紙を活用して)これに裏書を加えるように、まさに草稿においてテキストの生成と共に思考と言説が書記されていく過程がそのまま痕跡として遺される。これらの言説は、とりわけ、独特な「慈円語彙」といふべき決まり文句によって生成し表記されていく。著作間相互の参照の指示が多いのも特徴的である。何より特筆されるのは、識語に限らず、随所に、著者の卑下や自讃詞、また批判や教訓など、慈円の「述懐」といふべき自己言及に満ちていることである。殊更に、識語に顕著に示されるその著作についての(何故書き記すのか、という)強い自意識の表明は、彼の、自らが書くこと、言葉によって表現することへの深い欲求であり持続する意志を感じさせずにはおかない。

〔註〕

- (1) 諸宗学者入其門、必可開悟自宗奥藏也。余、久学真言門、思慮其奥旨、勤修被行法、而付一部一尊篇目、雖搜随分之義理、於一宗至極、未弁定其至極。三部五部諸尊別行、或随往昔宿因、或依今生智分、取捨方々有道理、用否各々不偏執之故也。但、蟄居草庵之後、靜思惟之間、粗有開悟、聊以記之。但、於此經、至極者全不可書付、只可納心中事也。而余智力、如此事思慮之間、雖覺知之、甚以易廢亡、仍若今之開悟叶正意者、亡失尤有遺恨、仍聊以所書付也。他人不可当眼矣。
  - (2) 「青蓮院吉水藏慈円関係聖教について」(上) 註5、『密教3』所収。
  - (3) 三種悉地法事
- 此法開悟子細、具記訖、爰賀陽院御所造宮訖、重可修鎮沙汰法之由、女房二品奉書到来。予申云、於安鎮法者、不能重勤行、今度御所非新造、只本予修安鎮了、四壁不改、又非新造、只屋々或中殿ヲ南へ引出、或對屋加造葉屋等被加少々潤色也、仍可修他法之由、令申入了。而只可随計申也云々、仍可修三種悉地法由、相存也。于時、承久三年十二月十日、參院

御所押小路殿入見參之時、眼前申上件子細了、殊有觀感、且以此次、真言興隆事、申上了、殊及御感涙一、希有ノ事也。

- (4) 「青蓮院吉水藏慈円関係聖教について」(上) 註17、阿部美香論文。
  - (5) 『溪嵐拾葉集』、大正藏二四一〇、第七七六卷七八四頁、下段二行目。
  - (6) 以上については、菊地大樹『鎌倉仏教への道』(講談社、二〇一一年)第四章第一節でやや詳しく解説している。
  - (7) 『岡屋閑白記』寛元四年閏四月二十六日条。
  - (8) 平雅行「青蓮院の門跡相論と鎌倉幕府」、川音能平他編『延暦寺と中世社会』法藏館、二〇〇四年。
  - (9) 赤松俊秀『鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九七五年。多賀宗準『慈円の研究』吉川弘文館、一九八〇年。水上文義『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八年。
  - (10) 『統天台宗全書』(密教3) 附属解題。
  - (11) 同前。
  - (12) 『統天台宗全書』(密教3) 二七九頁。
  - (13) 本帖本奥書「本云、天永四年仲春之比抄」出之、皆悉依「先師説」也、敢不レ可レ出「窗外」矣、後賢有レ恐、レ、。末帖奥書「建長二年二月十八日於康樂寺御所賜「御本」書写畢、是則可レ言「出世本懐」歟、可レ秘、レ、。廿二「禪俊」。
  - (14) 『統天台宗全書』(密教3) 二四頁。
  - (15) 「青蓮院吉水藏慈円関係聖教について」(上) 註17、阿部美香論文。
  - (16) 「青蓮院吉水藏慈円関係聖教について」(上) 註7、阿部論文。
- 【付記】 貴重な吉水藏聖教の画像を活用させていただき、かつ紹介をご許可賜りました青蓮院門跡 東伏見慈晃現下に深く感謝申し上げます。本研究はISCの国際展開拠点形成事業(先進型A)「テキスト学による宗教文化遺産普遍的価値創成学術共同体の構築」(名古屋大学・阿部泰郎)によるコレージュ・フランス(代表…ジャン・ノエル・ロペール)との国際共同研究による成果を含んでいる。